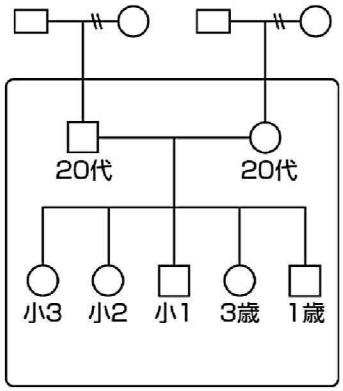
小窓越しに面会

― 低栄養で施設入所措置になった１歳児 ―



近所から子どもが学校に行かずに家でワーワーしていると市役所に連絡があった。子どもが大勢いるがどの子どもについても乳幼児健診や予防接種を受けた記録がなく育児・生活状況が気にかかるために訪問した。

母親が妊娠しているらしいという情報もあったので、妊婦健診受診を勧めることと第４子、第５子の健診が未受診のため様子を確認することを目的に訪問した。訪問すると母親は玄関のドアを開けずにトイレの小窓を開けて「大丈夫です」という。その後何回か訪問したが、ドアは開けてもらえなかった。家にいる子どもたちに聞くと母親は寝ていると言うことであった。何度目かの訪問で母親から妊娠しているらしい、お金がないので妊婦健診が受診できないことがわかった。今までも病院の健診は受診していないが無事に生まれたので受診しなくても大丈夫だと話した。

母親、父親ともに両親が離婚し、一人っ子として祖父母に育てられ、兄弟や頼りになる親族は近くにいない。母親、父親は子どもは多ければ多いほどよいと言っているが、自分自身が保護者から育てられた経験が乏しい。父親は働いているが経済的に厳しく、友人に安いアパート（２間）を見つけてもらって入居している。小学校入学になってもランドセルがそろえられない家庭で、子どもたちは保育園や幼稚園に通園していない。

第４子出産前に転入してきたケースで、第１子、第２子、第３子は不登校、第４子は妊婦健診受診なしの飛び込み出産をし、乳児健診、予防接種の受診がなかった。第５子も妊婦健診なしの飛び込み出産で低体重のため未熟児療育医療を使ったが、退院後受診が途絶え連絡できないケースであった。

保健師が訪問しても第４子、第５子に会えないために児童相談所に連絡をした。同じ頃に近所から第５子の顔を見たことがないと通報があった。児童相談所が第５子の生存を確認するために立ち入り調査を実施した。父親が対応してドアを開け児童相談所は子どもの生存については確認できた。家の中はメチャクチャの状態で、第５子は３歳児の大きさのオムツだけをつけてベビーベッドに寝かせられていたと児童相談所から保健師に連絡があった。

父親は飲食店で働いており日中は寝ていて夜働きに出るという生活で、子どもたちもそれにあわせて昼間寝て夜起きてテレビゲームをするという生活をしていた。

児童相談所、小学校、保健師、民生委員で情報交換をし、小学生の３人と３歳の第４ 子は小学校の給食が始まるまでに学校から迎えに行き、給食だけでも食べれるようにした。第４子は給食を食べたあと小学校の先生が家に連れて行くということをしていた。保健師は母親としっかりした信頼関係を作ろうと家庭訪問を繰り返した。

「体調どう？」とかっていう形で何回か訪問をして、出産までの間にできるだけ受診を、１回でも受診をという形で進めていきたかったんですけど、結局やっぱり同じような形で飛び込みのお産になってしまって。その間、こどもたちが夏休みの期間、ご飯を食べてない。給食がないの

で。こどもたちは外で遊んでたりとかするので。あとは、じゃなければ、お家に入ってたりとかすると、こどもたちに、ちょっとしたおやつを持って「あげるからドア開けて」。入れば、お母さんはもう、そういう中まで入ってくることは拒否をするので、少し様子を、そこでお家の様子とか、１歳の子の様子をちょっと見るっていうのをしていたんです。実際お家には入れないので、この１歳の子を見るということは難しかったですけど。

母親が第６子の緊急出産になり、第４子、第５子を出産した病院に入院した。今回も妊婦健診なしの飛び込み出産であった。母親が出産で入院している間は第５子を児童相談所が保護することになった。初めて家から出た第５子は１歳になっているのに立位ができなく、言葉もでていなかった。第５子を受診させるために、未熟児で生まれた第６子が入院している期間に第６子の面会をかねて、保健師が母親と同伴受診をした。第５子は低栄養と脳性麻痺の診断がついた。第５子の体重は６kg程度で、髪の毛も切ったことがなく長いままであった。第５子は母親を呼ぶためにベビーベッドの柵に自分の頭をぶつけていたらしく、頭に瘤ができていた。

四つ這いしか取れない状態で。だから、お母さんとしては、あまり可愛くないんじゃないですか。もちろん言葉もないですし、歩けないし。寝返りと四つ這いぐらいの姿勢しか取れない状態でしたね。この子も、ぜひもう診察してもらわないといけないねっていうことで、同じ、その入院した子の、赤ちゃん、第６子が生まれた時、一緒に病院の受診とか、この子を連れての受診とかも何回か行きましたね。同伴受診。

お母さんとしては、上の子の小学生の子じゃないとミルクは飲まないっていう、お母さん……。お母さんの言い方、言い分ですよ。だから、あまりお母さんとしても、抱っこもしない、可愛がりもしないで。上の子の女の子だったらミルクは飲むけど、自分の手からはミルクは飲まないようだねっていう。やっぱり、この子にあんまりかかわりたくないっていうのがあったのかなと思うけど。

第６子も未熟児で出生し、未熟児養育医療を使って少し長く入院していたが、退院の時期になっても母親は新生児に必要な物品をそろえられない。そのため、第６子は児童相談所が保護し、市内の児童福祉施設入所措置になった。第５子は両親が養育できないと言うことで脳性麻痺に対応できる他市の児童福祉施設入所措置になった。母親、父親ともに第５子、第６子が入所している施設に面会に行かなかった。

第４子は３歳になるがトイレに行くことを教えられていなく、オムツをしたままである。子どもたちは食事を取っていないことも多いが、お父さん、お母さん大好きと言っている。収入があった時にはタクシーに乗ってマックを食べに行き、ゲームセンターでゲームをさせるなど子どもが喜ぶことを行っている。

感想：家庭訪問を拒否するケースは家の中がゴミ屋敷状態になっていることが多く、このケースも同様の状況があった。児童相談所の立ち入り検査で子どもたちの生存は確認できていたが、第５子の脳性麻痺は１歳を過ぎるまで把握できなかった。保健師は第５子を見てすぐに受診が必要と判断し母親に受診を勧めたが、母親は受診に消極的だった。知的に問題のない母親に同行受診が必要か迷いつつも、子どもの健康を護るために保健師が受診に同行し第５子の療育が可能になったケースである。

（小笹）